公益財団法人 日本骨髄バンク 第77回 業務執行会議 議事録

開催方法：コロナ禍の影響によりWEB会議形式で開催
（本会議をWEB開催することに関して全理事の同意を得た）
日　　時：2021年（令和3年）5月14日（金）17:30～19:10
出　　席：小寺 良尚（理事長）、加藤 俊一（副理事長）、佐藤 敏信（副理事長）
浅野 史郎（理事）、大久保 英彦（理事）、鈴木 利治（理事）、高梨 美乃子（理事）
谷口 修一（理事）、橋本 明子（理事）、小野 高史（監事）、椙村 岳央（監事）
欠　　席：金森 平和（理事）、高橋 聡（理事）
陪　　席：山崎 翔（厚生労働省健康局難病対策課移植医療対策推進室室長補佐）
事 務 局：五月女 忠雄（事務局長）、渡邊 善久(総務部長)、小島 勝(広報渉外部長)
小川 みどり(移植調整部長 兼 新規事業部長)、吉川 亜子（ドナーコーディネート部ＴＬ）
戸田 泉（移植調整部ＴＬ）、関 由夏（関東地区事務局地区代表）、竹村肇（総務部）
上原淳(総務部)
（順不同、敬称略）

1)　開会

開会にあたり小寺理事長が挨拶した。

2)　業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第6条により本業務執行会議が成立した。

3)　議長選出

業務執行会議運営規則第5条により業務執行会議の議長は理事長があたるとされ、小寺理事長が議長に選出された。

4)　議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は、業務執行会議運営規則第8条により議長と出席した副理事長が記名押印する。小寺理事長と加藤副理事長、佐藤副理事長がこれに当たるとされた。

5)　議事録確認

前回（2021年4月9日）の業務執行会議事録案を全会一致で了承した。

〔議　事〕

6)　協議事項（敬称略）

（1）令和２年度事業報告の原案提示

五月女事務局長が資料に基づき説明した。

概況としては、日本骨髄バンク（以下、当法人という）は令和２年度（以下、今年度という）の事業計画に基づき「普及啓発事業」と「連絡調整事業」を推進した。１．ドナー登録者数。今年度の新規ドナー登録者は2万7218人で前年度4万7655人に比べて2万

437 人減少した。登録者数は 53 万 953 人となった。登録窓口別の内訳は、①献血併行型登録会が 3919 回実施で 1 万 8345 人、②日本赤十字社（以下、日赤という）献血ルームなど固定窓口が 8178 人、③集団登録会が 55 人、④保健所その他が 640 人だった。２．移植数と患者登録数。当法人が仲介した非血縁者間の造血幹細胞移植は計 1096 件（前年度 1232 件）より 136 件減少した。累計移植数は 2 万 5330 件に達した。患者登録数は国内 2090 人、海外 394 人の計 2484 人だった。下に移植件数と移植率を記載した。３．事業の概況。（１）組織運営。収支相償に基づき慎重な予算執行に努めた。退職者補充のため職員を適宜採用した。（２）普及啓発事業。世界骨髄バンクドナーデー（毎年 9 月第 3 土曜）に合わせて、骨髄バンクと関わりのある著名人による骨髄バンク応援メッセージ動画を公開した。コロナ禍により大学での登録会や語りべ登録会等の開催数は減少した。若年層ドナー登録拡大に向け、提供の可能性がある若者を発掘するためのドナーリクルート動画や、産学共同によるドナーリクルートアニメ動画やマンガ冊子等の制作を進めた。対面でのアプローチが困難なコロナ禍で、企業のドナー休暇制度導入を引き続き推進した。ドナーリテンションとして動画投稿サイト「YouTube」公式チャンネルや公式 Facebook、Twitter で情報を随時発信した。各地でドナー登録の推進の要となる「骨髄バンク推進連絡協議会」の設置を推進して、都道府県担当者会議を初めてＷＥＢ開催した。（３）連絡調整事業。「造血幹細胞移植支援システム」で「医療機関支援機能」を 2020 年 11 月 30 日に稼働させた。これにより医師の作業負担を軽減し、患者登録までの期間短縮にもつながった。（４）個人情報保護に関する事案。発出業務等の見直しや研修などの対策を継続的かつ広範囲に実施した。職員を対象に毎年実施している「標的型サイバー攻撃に対する模擬訓練」を 2021 年 2 月～3 月に実施した。昨年度同様に職員へ訓練用偽装メールを送り、注意喚起した。開封率は 12％と 2019 年度（8％）に比べ悪化した。（５）新型コロナウイルス感染拡大。新型コロナウイルス感染拡大により、全国大会やドナー登録会、各種研修会など多くの対面イベントが中止となった。職員やコーディネーター向けに行動指針を策定した。地区普及広報委員・説明員には安全確保と感染拡大防止に関する注意喚起文書を複数回発出した。各部で事業継続に必要な施策を打ち、骨髄バンク事業を 1 日も休業することなく令和 2 年度を終えた。緊急避難的に造血幹細胞の凍結を認め、今年度は 205 件の凍結が実施された。ドナーとの面談にＷＥＢ会議システムを採用するなど感染防止に万全を期した。以上である。ここからは先は個別項目であり、後ほどお目通しいただきたい。コロナ感染防止について、3 頁の 5 にコロナ禍対策として詳細を記載した。Ⅱの管理部門。１．財政運営の（１）決算の状況である。令和 2 年度決算は来週の決算監査を踏まえて数字が確定する。現時点では若干の黒字を確保できる見通しである。移植件数減少に伴い減収となったが、支出も大きく減った。コロナ禍により大きな研修会等が中止になるなどして交通費が大幅に減った。決算数字が確定次第、改めて詳しく説明する。

以上の説明の後、意見交換が行われ、全会一致で承認された。

（主な意見）

＜加藤＞　2 頁（５）新型コロナウイルス感染拡大の項目に 205 件の凍結が実施されたとある。7 頁には「凍結は 245 件の申請があり、205 件の移植が完了した」とある。凍結したのが 245 件なのか。

＜小川＞　移植完了が 205 件であり、凍結して移植完了していないものは含まれていない。2 頁の部分はもう少しプラスとなる。修正する。

＜加藤＞　正確には、凍結したうち 40 件はまだ移植されていないということか。

＜小川＞　はい、245 件の凍結申請には、まだ採取に至っていないケースが含まれている。

＜加藤＞　数字を正確に残しておく必要がある。凍結はしたものの、移植はしなかった事例があった場合は、どのような問題点があったのか。また凍結して移植した事例で問題点はなかったのか。日野班でも課題の一つであろうかと思う。当法人が陪席や議論もしないということはよくない。業務執行会議や理事会で一度議論すべきでは。

＜小寺＞　以前（凍結実施）100 件ほどの時点で、医療委員会でアウトカム含め検討してもらっている。神田善伸委員をシニアオーサーにして論文化されつつある。ただまだ初期段階であり、現在は倍以上の件数になっている。総括し、然るべきところで、然るべき方法で発表することは必要だ。

＜加藤＞　この件は医療委員会が責任をもって解析し、提言するという理解でよいか。

＜小寺＞　その通りである。

＜橋本＞　2 頁の個人情報保護に関する事案について「訓練用偽装メールを送り、開封率は悪化」とある。その後どのように指導しているのか。

＜五月女＞　専門業者に依頼し、訓練用偽装メールを送っている。開封してしまった場合、「これは訓練用偽装メールである」「今後注意するように」という文言が表示される。本人が「開封してはいけないメールを開封してしまった」と認識する訓練である。毎年どの程度の職員が開封してしまったのか判明する。2019 年度と比べると開封率は少し悪化した。訓練用偽装メール自体が非常に巧妙である。当法人業務に近い内容で、引っかかりやすくなっている。よく注意すればきちんと見分けられる内容になっている。定期的に実施することで、本物のウイルスメールを受信した際に開封しないようになると考えている。

＜橋本＞　理解した。もう 1 点、9 頁「手紙交換について」である。前回感想を伝えたが、重ねて伝えたいことがある。手紙ＷＧ座長をつとめて、色々と感想がある。（長年続いてきた）手紙交換の見直しというテーマで、移植調整部、ドナーコーディネート部で手紙交換に関与している職員やコーディネーションスタッフにフリートークという形で様々な意見、お言葉をいただいた。結果的にとてもよい形で改善されたと思っている。新しい手紙交換の方法はＨＰにも記載した。時間がある時にご確認いただきたい。皆さんが本当によくやってくれた。もう一言だけ申し上げると、手紙交換が始まった時代と違って（スマホなどＩＴ機器の浸透で）今の若いドナーや患者は長い手紙を書くという習慣がない。メールで御礼を送る行為に違和感がない時代だ。手紙を書くことはとても力がいるし、心がこもるという経験をしてもらえるのではと考える。病気と闘っている患者たちのオープンチャットに参加することがある。その中で「手紙って書いた方がいいんだよね？」というやり取りがあった。「ぜひ書いてあげてください。ボールペンが握れるようになったら書いてください」と言ったら、とても活発に答えが返ってきた。このような経験は患者とドナーの心温まる心の交流になると実感した。

＜浅野＞　移植件数と患者登録者数である。移植件数は前年度より 136 件減ったとあり、患者登録者数も 108 人減っている。患者側の移植へのニーズはそんなに大きく変わらないと思う。136 件の減少の原因は何だろうか。コロナ禍によりドナーが見つから

なかったという理由が大きいと思うが、通常時期と同じ需要があるとしたら、136件の人は移植が受けられなかったということになる。コロナ拡大が影響していると思うが、本当にそうなのか。もう少し細かく見る必要があると考える。推察するにコロナ禍だけではなく、それはコロナを恐れることにより（言葉はよくないが）過剰反応という要素もあったのではないか。ドナーの安全は絶対に守らなければいけないが、もう少し検証する必要がある。ドナーのコロナ禍における安全確保について（今のやり方が）過剰なのか否か。必要十分な安全確保でよいのではないか。検証のために、136件減少した要因をきちんと振り返る必要がある。

＜小寺＞　昨年（2020年）4月の緊急事態宣言時に、既に提供が決まっていたドナーがおそらく28名ほどいた。その28名の採取予定病院がコロナにより閉鎖されたりした。そうした困難な状況の中で事務局が頑張って27名が提供に至ったという事実がある。素晴らしいと思う。残り1名はコロナではなく別の理由で採取中止となった。浅野理事がおっしゃる移植136件減少について、2020年3月～6月までの4か月間の本邦の同種造血幹細胞移植数の状況は、当法人を介した骨髄・末梢血幹細胞移植は減り、さい帯血移植が増えた。更に増えたのは血縁間ハプロ移植である。結果、当該4か月間の造血細胞移植数は1年前よりも微増しているというデータがある。答えとしては、移植が受けられなかったというのではなく、さい帯血移植や血縁ハプロ移植に移動したという数がかなり含まれるのではないか。4か月間だけのデータなので、令和2年度として振り返りまとめる必要はある。（移植を待つ患者が）必ずしも移植を受けられなかったということではない。またドナーに対する安全のことだが、これは直接携わった事務局から答えた方がいいのかもしれない。自分が知る限り、ドナーの安全担保は非常に重要であるが、過剰になっているということは無い気がする。どのような理由でドナーが提供に至らなかったのか実態を調査する必要はある。

＜加藤＞　他の移植も含めた概況を、この事業報告書にも記載すべきでは。日本全体として、我々がどういう位置にあったのかを将来振り返る際に、その情報がないと誤解の歴史が残ってしまう恐れがある。もう一つは、危機管理委員会での検討事例が業務執行会議にあまり報告されなくなってきた。ドナー安全委報告の中に一部は見られるが、全部ではない。業務執行会議の在り方として危機管理案件は非常に重要である。そこから学び、次の事例に活かしていくべきだ。我々理事が認識し、責任を持たないといけない。1月15日までのことはドナー安全委員会の報告として書いてある。その後どのようなことがあったか次回の理事会で事務局から報告してほしい。

＜小寺＞　次の理事会までに事業報告書に当該の内容を追記した方がよいという提案か。

＜加藤＞　その通りである。もし間に合うのであれば追記した方がよい。各委員会の活動はしっかりと記録として残っている。危機管理委員会は理事会の下にある独立した委員会である。それがどこにも記載されていないということは事業報告として足りないのではないか。以前はそれなりに報告していたような記憶がある。

＜小寺＞　理事会や業務執行会議が「危機管理委員会的な役割」を果たしていくのが、情報を集約する上でも、当法人としてそれを咀嚼し実行に移す上でもよいかと考えていた。迅速に動かなければならない。昨年3月～6月までのデータは自分が収集したアバウトなものであり、正確なデータではない。正確なデータとなると1年以上待たないと現状のシステムでは厳しい。自分が集めたデータは、当法人のドナーから

の移植件数は当法人から、さい帯血移植件数は高梨理事にお願いして日赤のバンク事業部署から提出いただいた。血縁移植（ハプロ含む）は日本造血細胞移植データセンターの熱田由子センター長にお願いした。患者のアウトカムレジストリーは終わっていなくても、データセンターで採取した血縁ドナーを登録している。血縁ドナーとして何人が提供したかという数字はある。その3つの数字から得たデータである。高梨理事と熱田センター長の了解が得られれば、令和2年度データとして次回の理事会までに出せないことはないと思われる。

＜加藤＞　令和3年3月31日までのデータを網羅するのは難しいかもしれない。この事業報告書の件と、毎月実施している業務執行会議等への報告は別でお願いしたい。一年間のものをまとめて報告すると、古いものもあり重要度の認識が甘くなる可能性がある。前月までに起こったことを（途中経過でよいので）事務局から毎月必ず報告するということを今後のルールにしてほしい。我々理事が取り残されず付いていけると思う。自分は現場を離れて感度が悪くなっていると感じているのでぜひお願いしたい。

＜小寺＞　報告するというのは具体的に何を指すのか。

＜加藤＞　危機管理委員会で何が議論されて、どうなったかである。

＜高梨＞　浅野理事の懸念でもあるが、毎月約200件の非血縁者間移植が実施されている。コロナ禍の影響を受けた2020年度も割合はほぼ維持されている。ハプロ移植や血縁者間の情報は持ち合わせていない。

＜小寺＞　さい帯血バンク側では、令和2年度のさい帯血の移植件数は把握しているか。

＜高梨＞　データを出せると思う。

＜浅野＞　移植件数は変わっていないということだが、それが例年よりさい帯血移植にシフトして、さい帯血移植が増えている。（患者側は）本当は骨髄移植を望んでいるが、ドナーがコロナ禍の影響で提供できず、さい帯血にやむなく移ったということになると思う。私の理解としては、さい帯血移植をするのは「やむを得ず」ということではないか。ベターな選択としては本来は骨髄移植で、できるならば骨髄移植がよいが、やむを得ずさい帯血移植にした状況があったのでは。それが移植件数減少に反映されたのではないか。その状況とは何か。加藤氏がおっしゃった「ドナー安全委員会や危機管理委員会がどのように動いたか」であり、そこで具体的にどのような議論と結論に至ったかのケーススタディである。それを明らかにして、今後を考えたい。コロナ感染疑いや、移植施設がコロナ禍でＮＧになったなどをどのように克服するか、将来に向かって議論すべきではないか。

＜小寺＞　浅野理事と同じ考えである。136件減少は当法人にとって大切な数字である。先ほど話した造血細胞移植の昨年度件数はこの事業報告書に入れた方がよいか。

＜加藤＞　もし間に合うのであれば、昨年度（12か月）分を入れた方がよいかと思う。今年分は厳しいかもしれないが、今後どうするかということで1月15日以降の例は報告書とは別に、理事会や業務執行会議でしっかりと検証しながらやっていく体制が今後は必要では。

＜小寺＞　今回はこの事業報告書の記載でいく。実態をしっかり解析するということは必要である。5頁（3）ＷＥＢによる語りべも開催しているが、これは開催件数を記載した方がよいのではないか。

＜小島＞　正確な数字ではないが件数は一桁である。そのため記載していない。

＜小寺＞　11 頁 7 の（2）検体保存事業への協力とあるが、保存された検体の利用状況はどのようになっているか。色々なところから申し込みがあるのか。

＜高梨＞　年に数件の申し込みである。ＤＮＡにする作業が大変であり、かつ 1 件の研究に対して数千単位のサンプル希望がある。申請者にはお待ちいただいている。継続はしている。

＜小寺＞　1 頁の「骨髄バンク推進連絡協議会」というのはどのような組織か。

＜小島＞　基本的に自治体に設置していただくことを要請している組織である。

＜小寺＞　「全国骨髄バンク推進連絡協議会」（以下、全国協という）という団体がある。全国が付いているか付いていないかだけの違いであるため（紛らわしいという意味で）どうかと感じる。全国の自治体で、この名称が定着しているのか。

＜小島＞　実際には都道府県で設けている協議会の名称は様々で統一されていない。

＜小寺＞　全国協から意見をもらったことはあるか。

＜小島＞　今までにない。

＜橋本＞　過去の理事会等で「この名称はあまりよろしくないのではないか」と申し上げている。その都度話題にはなるが、そこで終わっている。今のところ不都合がないと言い続けて 10 年以上過ぎている。ボランティア団体に名称を変えろと命じることは決してできない。当法人がこの名称を変更して、しっかりと世間に発表することが大切だ。全国協の幹部も当法人が名称を寄せてきたと考えている。名称は早急に変えた方がよい。

＜加藤＞　これ以外の名称が自治体にもあるので、この名称一つで本当によいのかと 2 回ほど発言したことがある。自治体によって色々な名称があるため、代表してこの名称を記載するという説明が事務局からあったと思う。各地でドナー登録の推進の要となる「自治体が設置する骨髄バンク推進連絡協議会」の設置を、という記載で自治体という言葉を前に置くことで混乱は避けられるのでは。

＜小寺＞　全国協が先であるため、やはり違和感がある。

＜大久保＞　以前も検討された。「骨髄バンク推進連絡会議」や「骨髄バンク推進協議会」として各地で設置するということでお願いしてきた経緯がある。これは一例である。似たような名前だが、そうした策もあると思う。

＜橋本＞　ユースアンバサダー（以下、ＹＡという）もよい活動を始めている。研究班で制作したＰＲ映像も大変よいと思う。時代は変わっているのでＹＡの若者に「どんなＰＲがいいと思う？」と聞けば、よい名称が多く出てくると思う。それらを取り入れて「今後はこの名称で」とお願いすればよいのではないか。これまでの名称の一部分だけを取って済ませるのではなく、ＹＡに考えてもらってはどうか。

＜小寺＞　大久保理事が言うように「名称は柔軟に対応してきた」ということであれば、事業報告に「骨髄バンク推進会議」と記載することは可能か。

＜小島＞　当法人から「このような名称を掲げてください」と言っている訳ではない。（厚労省の通達に沿って）表記しているだけなので変更できる。

＜小寺＞　もう一箇所「骨髄バンク推進連絡協議会」と記載がある。そこも置き換えてほしい。

＜小島＞　置き換える。

＜小寺＞　橋本理事が提案した新名称は、ＹＡを中心にヒアリングしてもよいのでは。

＜小島＞　早速ヒアリングしたい。

＜小寺＞　ほかに意見がなければ（修正した内容を）令和２年度事業報告書として次回の理事会に提出する。令和２年度決算会計報告は当日配付になるか。

＜渡邉＞　５月 28 日に期末監事監査を実施する。監事から承認いただけた段階で決算書類をお送りする。理事会資料発送日は期末監事監査日と同日なので、監事に承認いただければ紙で発送する予定である。

(2) コーディネーターに関する内規変更の件

吉川ドナーコーディネート部チームリーダーが資料に基づき説明した。

面談実施に至らなかった場合のコーディネーター（以下、ＣＯという）活動費支給案である。面談に至らなかった場合でも（その時点までに）ＣＯは様々な活動を実行しているので、一定の活動費を支給するという変更案である。ＣＯの活動費は面談を実施した際に支払われる。様々な理由により施設に行っても面談実施に至らない場合もある。その際も多大な労力を要するケースがある。ＣＯが病院に事前到着してドナーを待ったがドナーが現れなかった等、面談が実施できない場合が起きる。想定されるケースとして、①ドナーが面談施設に現れず面談が実施できなかった。②ドナーの到着が大幅に遅れ、結果として面談が実施できなかった。③患者理由終了の連絡が当日入ったが、ＣＯが既に施設に到着して待機していた。などがある。今後は面談が実施できなかった活動にも、活動費を支給したい。対象としては全国で活動しているＣＯ 約 160 名。支給額は一律加算方式で通常の活動費（面談１回 5,700 円）に対し、ドナーへ説明していない事情に鑑み、会議研修会出席時と同額 5,000 円を支給したい。想定件数は年 20 件程度で、総所要額見込みは　5,000 円×20 件で年間 100,000 円である。このようなケースでは、ＣＯはドナーに何度も電話をかけて連絡を試み、地区事務局から指示を仰いだり、担当の調整医師に（ドナーが来ない）事情を説明する等、特別な対応を実行している。実際に発生する件数としては少ないが、通常と異なる特別対応や関係各所への配慮、移動の手間等を含め、活動費を支払う形として整理したい。

（主な意見）

＜浅野＞　今回、この支給案が提案された理由を知りたい。ＣＯから要望があったのか。それとも事務局がＣＯの状況を忖度したのか。この案は誰が作成したのか。

＜吉川＞　今まで内規に定められておらず、明確な金額もなく、支払っていなかった。ＣＯから希望があった訳ではない。地区事務局から「30 分～1 時間近くドナーを待ったり、調整医師と連絡を取ったりとしている中で、活動費は支払えないか」という提案があった。事務局長と総務部長に相談して今回の議案をまとめた。

＜浅野＞　承知した。

＜鈴木＞　ＣＯへこれまで支払われていなかったことは気の毒だ。約束していてドナーが来なかったという事実は（約束を守らない点で）その後はドナーとして（プールから）外れるということになると思う。そのあたりの処理はどうか。ドナーが来ないことによる待ちぼうけ料を払うという主旨は理解できる。「ドナーが来なかった」という事実をしっかり裏付けなければならない。そのあたりはどう考えているのか。

＜吉川＞　病院に（連絡なしで）来なかったドナー全員を、ドナー登録から外しているかというとそうではないと思われる。その後、連絡が取れて辞退になり、ドナー登録が

取消になったケースもある。自身の経験では、最終同意面談の当日朝にＣＯと連絡が取れていたドナーが、結局ご家族を含め面談に来なかった例があった。そのドナーはドナー登録を取り消した。「ドナーが来なかった」という裏付けは、現時点ではＣＯからの報告書で確認するしかない。別の方法があればご教示いただきたい。

＜鈴木＞　ドナーの名誉にもかかわるので、事務局からドナーに連絡して「●月●日の検査（もしくは面談）にお越しにならなかったと報告がありました。事実でしょうか」と確認する。約束の時間に遅れてきた場合も、同様に確認するとよい。（予定をすっぽかしたとなると）ドナーとして大変問題がある。ドナーのことでＣＯを問い詰めるのはよくない。少なくともドナーに直接確認する。事実上慣行化していたということであるから、今後はルーティンとして必須にするのがよい。事務局の手間が増えて申し訳ないが、年 20 件程度であれば面倒でも対応していただきたい。

＜小寺＞　「すっぽかされた」という証明だけは取っておくということである。記録として残してほしい。会議研修会出席時の活動費と同額の 5000 円という支給額に関しては、特に問題ないという理解でよいか。

＜一同＞　異議なし。

7)　報告事項（敬称略）

(1) 30 周年記念大会進捗報告

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

2021 年 10 月 2 日に開催する 30 周年記念大会は月 1 回の準備委員会を設け、準備を進めている。今回はＷＥＢ番組の進捗を報告する。専門の番組制作会社に作成依頼するため、3 社でコンペを行った。その結果、企業や中央省庁等のビデオ等 700 社以上の制作実績のある「ＬＯＣＵＳ」社（以下、Ｌ社という）に決定した。Ｌ社には記念式典（生中継）の撮影・配信も依頼する。ＷＥＢ番組の時間は最大 45 分。Ｌ社からは「30 分程度でもよいのでは」とアドバイスをいただいた。時間は内容次第だが、長すぎないようにしたい。ナビゲーターは日本テレビの矢島学アナウンサー（ドナー登録者、適合経験あり）に打診中である。コンテンツとしては 1. 対談。骨髄バンクの推進・広報に協力的な瀬古利彦氏と北別府学氏（患者、療養中）による対談を企画している。コロナ禍であり、北別府氏は広島県の自宅で療養中のため、Ｌ社と相談してどのような形がベストか検討する。2. 「ツナガル、イノチ。≪30 周年 version≫　」である。移植経験者や提供経験者等から写真と動画メッセージを募る。2020 年 9 月に「ツナガル、イノチ。」という映像を作成した。同じイメージで、今回は移植経験者や提供経験者を中心にメッセージ動画を作成したい。3. 感謝状贈呈団体紹介である。寄付金額、啓蒙・啓発に協力的か、支援が継続的か等の条件で全国から 5 団体をピックアップしている。映像で紹介するため「映像として見栄えする」点も要素と考えている。4. 次回開催地からのメッセージとして広島県知事と広島市長からメッセージをいただきたいと考えている。5. その他企画。現在考えている番組の尺（時間）なども考慮し、Ｌ社と今後詰めていきたい。式典が 5 か月後に迫っており、近日中に制作を開始する。

（主な意見）

＜浅野＞　制作会社は、3 社コンペでＬ社に決定したとのことである。3 社がエントリーした場合、（入札）金額を提示してもらって一番安い企業に発注することになる。決定額はいくらか。

＜小島＞　税込み 330 万円である。金額も考慮して依頼している。Ｌ社は金額も一番安く、企画力、また組むパートナーとして信頼できる点も加味して総合的に決めた。

＜浅野＞　実績もあり色々と優秀と判断したＬ社が、たまたま提示額も一番安かったということか。

＜小島＞　その通りである。

＜加藤＞　「ツナガル。イノチ、」の意味するところは何か。

＜小島＞　昨年 9 月に作成した動画のタイトルである。同じ「ツナガル、イノチ。」を使った。

＜小寺＞　記念大会の進捗報告はＷＥＢ番組のみでよいか。当日の式典（ライブ開催）についてはどうか。

＜小島＞　式典は通常の全国大会の記念式典をイメージしている。

＜小寺＞　例えばＹＡの若者を呼んで、ひな壇に並んでもらったり、情報発言してもらうなど「若返り企画」はあるか。

＜小島＞　記念式典は従来どおりの形式を考えている。

＜渡邉＞　ＷＥＢ番組に加えて、30 周年記念誌も同時並行で編集している。画面で簡単に紹介するので、イメージだけ掴んでいただきたい。フルカラー80 頁で編集を進めている。様々な外部関係者から原稿を集めている。過去の全国大会を振り返った写真特集やＡＣジャパンの過去 10 年間のポスターの紹介、また全国のボランティア団体を紹介し、インタビューも入れる。現時点で全てのページをお見せできないが、月 1 回の準備委員会には大久保理事に毎回ご参加いただき、内容をつめている状況である。紙面は理事長に随時報告しており、完成に近づいたら（製本前の実物に近い）モックアップ紙面をお見せしたい。

＜小寺＞　製本前に理事の皆さんに見せてほしい。

＜浅野＞　記念大会会場はイイノホールで契約したのか。金額はいくらか。

＜渡邉＞　金額は 100 万円強である。1 年半前にイイノホールを予約した。

＜浅野＞　番組の出演者は基本的に無償なのか。

＜小島＞　無償という訳ではない。ボランティア価格の謝礼を支払う。

＜浅野＞　矢島アナはドナー登録者であっても（民放の現役アナなので）きちんとした謝礼を支払うべきではないか。

＜小島＞　本来であればかなりの謝礼を支払う（クラスの）方である。過去にご協力いただいた民放アナの方々には薄謝でご出演いただいた経緯がある。

(2) バンクドナーへの新型コロナワクチン接種に関する厚労省への申し入れ

小川移植調整部長兼新規事業部長が資料に基づき説明した。

本件では厚生労働省（以下、厚労省という）側と昨日（2021 年 5 月 13 日）ＷＥＢ会議を実施した。田中彰子移植医療対策推進室室長、山崎翔室長補佐、小寺理事長、加藤副理事長、佐藤副理事長が参加した。新型コロナウイルスワクチン（以下、ワクチンという）の接種が始まることによりコーディネートに大変な影響が出る。具体的には mRNA ワクチン（ファイ

ザー製やモデルナ製）は接種後 7 日間は採取不可、自己血採血も原則 7 日間は不可となる。ウイルスベクターワクチン（アストラゼネカ製、現在継続審議中）は、接種後 28 日間のインターバルを設ける案となっている。以上からワクチン接種したドナーには採取調整に制限がかかる。骨髄採取の行程にワクチン接種が入ると、採取までの日程がとても多くかかってしまう事態になる。日程調整が長引くだけでなく、ワクチン接種が入ると場合によっては既に自己血を貯血していても採取日程を延期しなければならない。自己血は期限切れで廃棄される場合もある。再び自己血を貯血することになり、ドナーに大きな負担をかける。これを避けるためには、ワクチン接種日が決まるまでは日程調整をしない方がよい場合も出てくる。ワクチン接種が入りそうだとなった場合、接種日決定を待って日程調整を始める。そうすると採取がさらに遅れる。そこで厚労省へ以下のお願いをした。1. ワクチンの種類は mRNA にしてほしい。アストラゼネカ製は 28 日間のインターバルが長く採取日程調整が困難になる。血栓形成の発生報告もあり、G-CSF との相互作用を懸念する専門家もいるためである。2. ワクチン接種日との兼ね合いで採取への影響が及ばないよう接種日程を選択できるようにしてほしい、という依頼である。ワクチン接種日と種類を選択できるようにしていただくために、優先接種枠への組み入れや自治体の壁を越えて接種可能としてほしいという依頼をした。対象は、当法人の希望としては「案１　確認検査まで進み適格となったドナー」である。その対象が件数的に厳しければ「案２　選定されたドナー」を対象としてほしい。案 3 は案 1 と案 2 の混合型である。患者が登録してから移植に至るまでの各行程別日数だが、確認検査は患者登録から 30 日後ほど。選定は 50 日後ぐらい。確認検査をクリアしたドナーが、最終行程に入る前に接種する場合、最終行程への影響はかなり減る。予想規模は、全国平均で確認検査月 380 件、選定は同 136 件。次はスケジュールである。ワクチン接種の優先順位は 4 番目の「一般」に該当する。仮に一般国民接種が 10 月開始とした場合、10 か月ほどかかり、来年の 7 月までとなる。最初はドナーもほぼ 100%未接種で、多くのコーディネートに影響が出る。確認検査をクリアしたドナーの規模で考えると月 350 名から、選定されたドナーであれば月 130 名から（時間経過とともに）減る。首都圏に絞った場合である。選定ドナーは月 40 名弱、確認検査は月 100 名強。確認検査をクリアしたドナーへ結果を郵送する際に、接種優先の証明書を同封する運用を提案したい。選定ドナーも同様である。案 1 と案 2 の混合型は選定されたドナーが基本だが、確認検査ドナーも大都市圏で大規模接種センターがあれば含めてほしい。年明けになり接種側にも余裕が出てきたら、確認検査ドナーにも同じ対応を取り入れていただけたらありがたい。厚労省からは「要望としては承知した。ただ現時点では、詳細不明なためそれ以上の返事はできないが情勢をみながらより良い策を検討していきたい」との回答があった。主な意見を列挙する。「基礎疾患対象者の接種枠にドナーを組み入れられないか」「基礎疾患対象者の接種枠を持っている病院がバンクの採取施設であれば、その採取施設で採取予定のドナーはその施設で接種できればスムーズ」「自治体は様々な動きをしており全国統一の動きを依頼するのは大変難しい。自治体とは別枠で、病院の裁量で動けるところにお願いした方が実現可能性が高まるのでは」「ドナーは若くて健康というイメージがあるため、若いドナーを優先してほしいというのは国民の理解が得にくいのでは」「移植を待つ患者さんのためにも、という表現はどうか」という意見が出た。

（主な意見）

＜小寺＞　第 1 波の頃よりも当法人の業務には影響が大きく、複雑な事態になると感じている。昨日ＷＥＢ会議を開催し、議論する中でよい案も出たと感じている。

＜加藤＞　昨日は田中室長と山崎補佐に参加していただき話をした。厚労省としては全国の自治体は様々な動きがあり、全国統一のものをお願いするのは現実的には難しいということだった。大規模接種センターも開設されており、その点もお尋ねしたが回答はなかった。同センターが防衛省管轄ということもあるのかなと思う。不確実・未確定事項があまりにも多い。今後ＷＥＢ会議を継続して、互いに知恵を出し、最終的に一番現実的でよいものを選択するという理解である。採取施設が持っている基礎疾患対象者のワクチン接種枠に（ドナーを）組み入れられないかという提案をした。谷口理事の虎の門病院は採取施設であり、基礎疾患対象者も多い。患者への接種計画など具体的にどのように進めようとしているのか。

＜谷口＞　血液学会から厚労省へ「このような疾患の方々は優先接種してほしい」と要望している。それに対する返事は、自身としてはまだ確認できていない。血液学会としては「骨髄移植ドナーは優先接種してほしい」と要望しているはずである。

＜加藤＞　基礎疾患がある方々への接種は、全員を集めて１日で終わるものではない。採取施設において基礎疾対象者枠を１週間のうち１日などと設定し継続して実施すると思う。そこにドナーを組み入れていただき、6の倍数（ファイザー製ワクチンは１バイアル６名）でうまく運用して、余剰分は職員等に接種するのがフレキシブルな対応では、と厚労省から意見が出た。谷口理事から現場の感覚をうかがって、我々の検討会議で揉んでいく必要があると考える。しかし我々には権限がないため、厚労省から基礎疾患対象者の接種枠の中にドナーも含まれるという通達を出していただくという前提だろうか。

＜山崎＞　血液学会からの優先接種の要望にドナーが含まれていると把握していなかった。おそらく予防接種室などに要望を出されたのだと思うが、それを確認したい。基礎疾患がある方が今後どのような形で接種を進めていくかはまだ決まっておらず、例えば高血圧が少しあるが今までは通院していなかった人の通院が始まり、医師の裁量で接種できるようになるのか等、そのあたりが決まっていない。もし医師にある程度の裁量があるのであれば、調整医師や採取医師などが、確認検査を行う病院や採取施設で接種する方法を模索する余地はあるのかなと思う。私自身がまだ情報を持っていない部分が多いため、その辺の情報取集をしつつ相談させていただきたい。

＜加藤＞　このアイデアだけで全てのドナーをカバーできる訳ではないため、我々から提案した様々なパターンをカバーできるような、ドナーも緊急性を持った方であると理解いただけるような通知や通達をお願いしなければいけない。共有していただいているかと思うが、よろしくお願いしたい。

＜山崎＞　承知した。確認検査や選定によりドナーは常に発生していく。基礎疾患対象者の優先接種が終わり、一般への接種が始まったところでも生じるものであり、ある程度融通を効かせて接種するということかと思う。それは選定・確認から1～2週間の時点だったり、先に採取をして後から接種するような選択肢が残されていることかと思う。

＜小寺＞　非常に大事なことである。よろしくお願いしたい。

＜浅野＞　前提としてワクチン接種を２回受けないとドナーになれないということか。

＜小川＞　そうではない。あくまでも採取調整に影響しないようにワクチン接種で融通を効かせてほしいというものである。

＜浅野＞　ワクチン接種しなくてもドナーになれるという理解でよいか。
＜小川＞　その通りである。
＜浅野＞　むしろ問題はＰＣＲ検査か。ＰＣＲ検査で陰性のドナーしか採取できないということか。
＜小川＞　現在もＰＣＲ検査は実施している。陰性のドナーしか採取できない。
＜浅野＞　ワクチン接種スケジュールを、採取に影響しないように実施してほしいということか。
＜小川＞　その通りである。ワクチン接種しても、ＰＣＲ検査で陽性だったら終了となり、それは現在と同じである。
＜加藤＞　ワクチン接種の検討会議をもう一度開催したい。その際に自己血の採取はワクチン接種後原則 1 週間後となっているが、一般献血は 48 時間後となっている。それを踏まえて 48 時間がよいのかなども検討、議論することを承認いただきたい。
＜小寺＞　そのようにお願いする。

(3) 調整医師の新規申請・承認の報告

吉川ドナーコーディネートチームリーダーが資料に基づき説明した。

令和 3 年 4 月 3 日から 5 月 6 日に新たに申請・承認された調整医師の人数は 26 名、合計で 1180 名である。

(4) 寄付金報告

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

令和 3 年 4 月の寄付金額は 565 万円 6315 円、件数は 627 件であり、１か月としては非常に多い件数であった。高額寄付としては、家族間で移植予定の患者の家族から 100 万円、患者家族から数十万円の寄付もあった。

(5) 移植件数報告

渡邊総務部長が資料に基づき説明した。

2021 年度 4 月の移植件数は 104 件。全て国内から国内である。国内ＢＭは 74 件、国内ＰＢは 30 件である。昨年の同時期はコロナ禍で非常に件数は減っていたが、現在は月 100 件ほどで推移している。

（主な意見）
＜小寺＞　移植件数が更に増えることを望んでいる。現場の方々、それ以上にドナーの方々に頭の下がる思いだ。

以上